

特集Ⅱ 追悼：鑪 幹八郎先生

鑪 幹八郎先生を偲んで

禹 鍾 泰

京都文教大学臨床心理学部教授

日本の臨床心理学の大家としての鑪 幹八郎先生の名声は、私が日本の臨床心理学に対してほとんどなんの知識も持ち得なかった大学院生の時から聞いてはいた。当時、先輩や同僚たちから聞いた噂では、エリクソン研究の第一人者であることと、‘とにかく怖い’先生とのことだったので、どんな先生だろうと気にはなっていた。そのうち京都で開催された五大学臨床心理研究会という会合で初めて実物をお見かけすることはあったが、‘とにかく怖い’先生らしいので近寄らないように気をつけていた記憶がある。ところが、京都文教大学人間学部の開設が正式に決まって、幸運にも私もその一員として加えていただくことが決まり鑪先生も後から着任される予定であると聞かれたときは随分と心配になり、鑪先生が着任なさった後もできるだけ近寄らないようにしていたと思う。しかし時間が経ち、鑪先生との関わりも重ねられるにつれ、実はとても暖かい方であることも分かり、人間としての暖かさが学者としてのすごさの影に隠れていたことにも気がつくようになった。若い新米教員の私の良識のない言動に対しても黙ってニコッと笑みを浮かべることによって無言の論しを下さるやり方に随分と救われたものである。若い人を育てることはどういうことかよく分かっておられたと思う。

なにより私が感心したことは先生の鋭い直感力である。若い研究者であった鑪青年がエリクソン研究が日本の臨床心理学に必要な領域であることを判断し実践したことは大変正しい直感

であったことが後に証明されたが、京都文教大学に定員30名という大学院修士課程を開設したこともまた冒険的ではあるが鋭い直感ではなかったかと思う。まだその将来的展望が定まっていなかった臨床心理学だけで30名もの修士課程を開設することは、当時としてはあまり現実的な判断として受け止められなかったのではないだろうか。少なくとも懐疑的な反応の方が多かったのではないかと思う。しかしその驚くべき決断も合理的で現実的なものであったことが後に証明されたと思う。そのプロセスの中で、‘とにかく怖い’はずの鑪先生の物事の進め方が非常に丁寧で、若い人や少数派の意見にもしっかり耳を傾けていらっしゃったことは実に意外な一面であった。対立意見にもしっかり耳を傾けながらその受け止めるべき真意を理解しようとするお姿に深く感心させられたことが記憶に新しい。その丁寧な実行こそが直感的構想が現実のものになる背景であったと確信している。その鑪先生の直感に次いでアジア諸国との学術交流に向け、私は立場上その構想に深く関わりながらお手伝いさせていただいた。京都文教大学大学院の一つの事業としても進められたその構想の真意は、日本の臨床心理学の将来的方向性を暗示するものだったと思う。欧米の心理学に学び近くに確かめる、という先生の直感的方向性を大事にしたい。